

## D-2 : 外部資金の獲得

開催日時・会場 9月18日(金曜日) 10:45 - 12:15 会場E

### 間接経費の可視化

大学の運営、大学の研究力強化において間接経費の重要性は年々高まっている。日本ではH13に欧米の例を参考に導入されたが、その意義は内外にまだ浸透しておらず、民間財団等の助成プログラムは間接経費が用意されないことも少なくない。その一つの要因が、間接経費がどのような根拠で積算され、どのように使われているかの理解が各ステークホルダーに伝わっていないことにある。アメリカでは大学ごとに間接経費の積算根拠を示すことで、その意義を内外に示す仕組み作りが進んでいる。

本セッションでは「間接経費の可視化」をテーマに議論を進める。間接経費の可視化とは、なぜ間接経費が必要なのか、ということに答えることであり、間接経費も含めたイノベティブな大学の形を提案することに直結している。その中で、間接経費は単純にコストを埋める経費ではなく、イノベティブな大学を維持していくための未来投資であるという観点が重要となる。本セッションでは、間接経費をどのような事業に使いながら様々なステークホルダーにとって魅力的な大学を作っていくのかという視点で具体的な事例紹介を予定している。

また、本事業では、上記のような "間接経費を何に使うのか" という点だけでなく、URAがどのように関わることが求められているのか、という点についても議論したい。URAは、研究者、事務職員、企業関係者、ファンディングエージェンシー等、様々なステークホルダーの接点にあり、URAが間接経費の大学にとっての意義を理解し、発信していくことが今後求められる。本セッションでは、間接経費をめぐる各大学の状況を情報交換し、間接経費の可視化にまつわるURAの役割を議論する。

### セッション担当者

大西 将徳： 京都大学 学術研究支援室  
URA



京都大学大学院人間・環境学研究科修了、博士(人間・環境学)。日本科学未来館 科学コミュニケーター、神戸大学大学院理学研究科 学術研究員等を経て、2017年3月より京都大学学術研究室 URA。理工系グループ URA として工学研究科の研究者のプレアワードから産学連携等の研究力強化に資する活動を展開する傍ら、政府競争的資金獲得に関するURA活動の基盤整備等を推し進めている。

## 登壇者



加藤 洋介: 千葉大学 研究推進部 産学連携課  
イノベーション戦略係長

2002年千葉大学入職。2015年度から2016年度まで内閣府総合科学技術・イノベーション会議(CSTI)にて科学技術政策の策定・分析業務等に従事。2017年度に「千葉ヨウ素資源イノベーションセンター」の立ち上げ、2018年度にJST・OPERA事業の「健康まちづくり」プロジェクトを企画立案、2019年度に内閣府「イノベーション創出環境強化事業」の申請を担当し、千葉大学の産学連携体制強化を推進。



大西 功: 名古屋大学 研究協力部 社会連携課  
課長

1995年4月より名古屋大学にて主に会計事務を担当。国立大学法人化後は決算・予算に携わり、2016年から研究協力部にて産学官連携、ベンチャー支援業務を行う。愛知大学法学部卒、52歳。



原 豊: 東京工業大学 研究・産学連携本部  
部門長

マサチューセッツ工科大学博士課程修了(Ph.D.)、同大学ポスドクトラルフェロー。1987年株式会社リクルート入社。1998年より同社の技術移転事業の立ち上げから参画。2007年同社を退職。大学発ベンチャー企業の代表取締役等を経て、2017年東京工業大学着任。現在、研究・産学連携本部 産学連携部門長、上席URAとして産学連携を推進している。

## 登壇者



遠藤 美奈子: 東京工業大学 研究推進部産学連携課  
産学連携課長

東京工業大学において、URA等が所属する研究・産学連携本部と二人三脚で産学連携を推し進めている。企業におけるニーズを実現するための新しい制度を構築するべく、財務系の経験を活かし、制度設計から学内各部署との調整までの役を担っている。



田上 款: 京都大学 学術研究支援室  
URA

北海道大学大学院理学研究科化学専攻修了、博士(理学)。米国・国立衛生研究所・Visiting Fellowを経て、2013年4月より京都大学宇治地区担当URAに着任。2016年4月からはKURA・理工系グループに所属。研究者に伴走しながら、研究力の強化と学術の発展に貢献することが目標。研究環境の改善には間接経費の更なる活用デザインが不可欠との視点から、第一歩として間接経費の可視化に取り組む。